

〔論文〕

自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか

— 幼児の行動記録を手がかりに —

梶 浦 恭 子・西 澤 彩 木

名古屋学院大学・せた森のようちえん

要 旨

森で遊ぶ幼児は、自然物の中でも木の枝によく触れて遊ぶ。幼児は、枝を持ち、加工し、どのような、表現を生みだすのかを行動記録を手がかりに整理した。特に、道具を使い、枝を持つ対象児における手の動きの表しや、なぜそうするのかに着目して、考察を加えた。

枝に触れて、「いじる」だけの対象児の動きの記録からは、何かをつくろうとする遊びの出発点と想定できるのではないかと分析ができる。また、その時点で別の遊びをする他児による言葉の響きや、侍ごっこの勇壮な視覚情報が森のあちこちにあり、枯れ葉の斜面を勢いにまかせて走る足音や、ブランコを揺らして幼児同志がかかわる声や歓声の聴覚情報といった、様々な感覚情報が集まる。そこから対象児は、遊びの方向性を見出し、目的を生みだす。しばらくすると、対象児は内なる気持ちを、枝を叩く音で表し、自分で決めた目的をつぶやき言葉にする。この他に、対象児は、これまで人とかかわりが多くはなかった他者への伝達を行うといった行為や、つくる目的に向かう対象児なりの身体が多様な動きが見られることなど、素朴ではあるが数分前とは違う対象児の変容を確認することができた。

キーワード：自然物、木の枝、幼児の手、行動記録、表現

How Children Express Themselves Hands-on with Nature

— Records on Behaviors of Children in the Forest —

Kyoko KAJIURA, Saiki NISHIZAWA

Nagoya Gakuin University/Seta Waldkindergarten

発行日 2017年1月31日

1. 研究の目的と背景

1.1. 目的

本研究の目的は、自然物に触れて遊ぶ幼児は、木の枝に出会い、手に持ち、動かしたり、道具を用い加工したり変化させていくそのとき、幼児がどのような表現行為を生み出すのかを明らかにする。

幼児は、森の自然物の中でもとりわけ木の枝に触れて遊ぶ。その枝を、幼児が持ち、動き、何かをつくりはじめる造形的な場面を捉える。また、取り組む幼児の手の動きに焦点を当てる。

幼児の「つくる行為」の検証は、行動記録を手がかりにする。幼児は、枝に触れて、何かをつくりはじめるところから、枝にかかわり、感じ、どう取り組むのか。幼児が一連の「つくる過程」において、幼児が生み出す行為を明らかにする。

1.2. 背景

(1) 保育・教育現場における自然体験

近年、都市化や少子化、電子メディア普及などの社会変化を背景に、戸外に出て、自然と触れ合って遊ぶ直接体験の機会が減少傾向にあり、子どもの成長に少なからず影響を及ぼしているといわれている。

幼児は、身近な自然に親しむ中で、自然物である動植物や無生物に触れ、様々な発見をする。テレビやビデオなどの仮想的で無機的な世界ではなく、目で見て楽しみ、手に触れて感じ、その性質を知ろうと、操作し探索する。

そうした自然と幼児とのかかわりの重要性が指摘され¹⁾²⁾³⁾、また、保育現場における自然を取り入れて遊ぶ実践の先行研究が次のように報告されている。

幼児と自然環境との具体的な姿に目を向け、

野外の保育実践の振り返りを通じて、外界を感じる身体感覚と身体を調整する力の未熟さ・拙劣さを保持した幼児4人の育ちを整理し、個々の発達に合った野外の保育方法や配慮内容を具体的に検討している⁴⁾。自然環境にさほど関心を示さなかった1男が、他者の働きかけによって夢中になるという変容の過程を追う「森のようちえん」活動の報告⁵⁾では、細い木という素朴な自然環境が、保育者や幼児とその仲間に様々な遊ぶ行為をもたらし、遊びを豊かにしていることが明示されている。

また、同じ木の枝でも、地面に落ちている枝を拾いあげて遊ぶ「森のようちえん」活動の2歳S児を取り巻く詳細な事例報告がある。持つ枝は、幼児なりの動きや遊びを生みだし、幼児独自の行為によって、ごっこ遊びをつくり出し、他者ともつながろうとするなど、自然と幼児の関係性を行動記録から検証している⁶⁾。

(2) 感覚器官である手は「探索」から「表現」へ

「森のようちえん」で遊ぶ幼児は、目の前にある木の枝や石や砂、粘土、草花、木の実などの自然物を自由に「探索」し触れる。とりわけ、著者が対象とする「S森のようちえん」では、樹木が生い茂り、地面には枝が多く落ちているため、森の中で、幼児は必ず枝を目にしており、手にする。

自然の中で遊ぶ幼児は、五感が活性化され、敏感になるといわれる。幼稚園教育要領「表現」領域の「内容の取扱い」では、「豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに会い」とある。幼児が自然とかかわることは、きれいだな、不思議だなといった情動に出会うというものである。また、「生活の中で様々な音、形、手触り、動きに気づいたり、感じた

りするなどして楽しむ⁷⁾というように、遠くて特別な環境ではなく幼児を取り巻くごく身近な生活の中にある出来事や自然に、幼児が直接的にかかわることを推奨する内容が確認できる。

特に、「手触り」の感覚は、五感の中でも触覚にあたり、素材に触れて「感じ」楽しむ体験は、直接的で、幼児期には感覚を鍛える大切な経験と考えている。実際に、幼児は、面白そうなもの、興味のある目に映るものに反応し、手を伸ばし、探索する。触れる手の動きは、意思や目的をもった「行為」につながる。「S森のようちえん」の幼児が、枝に働きかけるときは、持つ、持ち上げる、抱える、枝を重ね何本も握る、振り回すなど、手指、手のひら、手首を多様に動かしている。その他に、幼児は、枝を高く掲げて出発の合図に使ったり、森の広い空間や急斜面でも手に持ち脇に抱えて持って走ったりと身体全体を使った躍動感ある動きや挑戦的な動きが出現する。

このように幼児は、長さや太さ、重さが様々で、自分にとってその時々遊びにふさわしい枝を選択し、その枝の特徴に合わせて持ち、握り、身体全体の腕、肩、足を使い操作するといった、幼児独自の動きを現し、ときに、予想をこえる大胆な動きを見せてくれる。

(3) つくって遊ぶ体験

一方で、鋸や小刀を工具箱から取り出して握りしめ、その場に腰を据え、見つけた枝を手で固定させ、何かをつくりはじめる幼児の動きが観察できる。幼児は、枝を加工する道具に出会うと、視線は指先に集中する。道具で木を削ったり穴を開けたりすると変化する。削っているさなか、あと少しで穴あけができる寸前に、手の中で割れ、形に成らない体験も少なくない。それにもかかわらず、新たに何かをつくり、道

具を持ち、時間と関係なく取り組むといった、繰り返す意欲を表す場面を多く観察してきている。

幼稚園教育要領「第2章ねらい及び内容」「表現」領域「3内容の取扱い(2)」に、「幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多い⁸⁾」という記載がある。では、幼児の「素朴な形」で行われる「自己表現」とは何か。また、先に述べた、つくる加工を繰り返す幼児の動きは、なぜだろうか。

つくる造形遊びの詳細な実態報告はこれまでに試みてはこなかったことから、幼児の自己表現とは何か、自然物を手にどのように行われているのかを追求したいと考えたことが筆者の研究の背景である。

(4) 「表現」する行為について

「表現」について、述べておこう。「表現」は、自己の「内なるものを外へ表すこと」、「内的イメージを表すためになんらかの象徴的記号を使って外在させる働き⁹⁾」である。

行為は、「環境や状況との関係で生ずる反応であり、ほぼ意志的、意識的反応¹⁰⁾」である。石倉は、「表現行為」について「幼児の表現意図を表す実際の動き」と扱い、例として、赤土のケーキの上に飾りの葉を置いた幼児の表現行為を、「飾るために置いたのであろう¹¹⁾」と観察者が捉えるならば、幼児の思いや意思がわかるよう「置く」でなく「飾る」と、表記を試みている。

本研究においても、幼児の「表現」の行為や動作については、背景にある環境と状況、幼児の意志や意識が内在するといった表記方法を試みる。

(5) 行動記録の内容について

事例を記録する手続きとして「つくる過程」に注目する。その意図は、以下である。

岡本による「表現」は、「遊びを遂行し自分独自の世界をつくり出すため」であり、「ことに子どもが小さければ小さいほど」「結果的産物（内面世界が投影された作品）よりも、表現するその過程を論じるべきである¹²⁾」という。

さらに岡本は、行為としての体験を、「行っている時の、感情や身体感覚、努力や‘達成感’、それらは表現を試みる中で出会う自分、表現の中に見出す行為主体としての新しい自分を感知することのはじまりでもあります¹³⁾」という。筆者も、岡本のいうように、作品という結果で幼児の表したいものを理解するのではなく、環境や状況に自分なりに瞬間的に対処する幼児の心の動きを含んだ身体の行為や動作を重視する考えである。

本論では、幼児が楽しんだり努力したりする「つくる過程」を観察し、幼児が木の枝とどのようにかかわり動くのか幼児の行為を探りたい。

2. 研究の方法

2.1. 事例収集の手続き

(1) 対象園、観察期間

観察対象は、滋賀県にあるS森のようちえんである。「にちようの森」（月2回第1、第3日曜日に活動）に通う幼児（平日は公立園へ通う）を対象にした。

対象児は、2014年度から「S森のようちえん」休日クラスに入園の5歳児 Ki児（2015年度）1名である。「にちようの森」に通う子どもの全体の人数は、S森のようちえん卒園児（平日クラスと休日クラス）の1、2年生10人、5歳児6人の、計16人である。幼児らにかかわるのは、主の保育者1人とスタッフ3人（共、著者を含む）である。

観察日および観察時間は、2015年1月～

2015年12月までの12か月間、月2回の内の1回（日曜日）。計11回実施した。

観察時間帯は、9時30分～15時（降園時刻の5時間30分）までを観察対象とする。

(2) 行動記録の方法

幼児の行動を記録する方法は、幼児が対象物である木の枝に触れ、持つ手の行為を1日約80枚から100枚程度カメラ撮影する。著者は、スタッフとして森で過ごす園生活に参与観察（実験的ではなく日常的な観察）する中、手の行為を筆記記録した。持ち帰り、行動記録用紙に選択した写真を取り込み、並べ、観察した情報を記す。共著者とは、毎回記録情報の交換を行う。

(3) 研究対象物について

幼児にとっての環境とは、「遊具や用具、素材など」「その場にいる友だちや教師、そのときの自然事象や社会事象、空間的条件や時間的条件、さらには、その場の雰囲気など¹⁴⁾とされている。

本論文では、自然の素材の中でも、森で頻繁に幼児に拾われる木の枝を自然物の対象として論じる。

(4) 研究対象児について

本研究対象児は、Ki児とした。Ki児は、4歳児の入園当初から、母親と離れることに抵抗はなかった。「森のようちえん」の自然体験をする園生活に適應していく様子が以下のように見受けられた。

入園して直ぐの2014年6月の森、遊び拠点に着くや否や、人のいない茂みの方を向き、一人で枝を上下に振る。7分後には斜面を登ったところの枝集積場所から身長の上もする木

の幹と思える太い枝を引っ張り出し、枝を引きずって下まで運ぶ。5歳児が持ってすでに活用している鋸をKi児も求める。思うことを身体に表す素直な姿を見せる一方、保育者やスタッフが挨拶の言葉をかけ、枝が動かないようにKi児の枝を抑える手助けを受け入れはするものの、表情や言葉の応答は少ない。

以上のように、Ki児は自然の中の生活に興味を持ち、自然物を手に触れる直接的体験に抵抗感はない。身体表現が先にあり、一方、他者との関係性において、積極的な身体や言語が触れ合うかわりや、感情の表しにはごく少ない傾向である。

そこで、「子どもが自分たちで生活をつくっていけるように」と幼児の主体性を大切にする「S森のようちえん」において、Ki児がしたいことをみつけ、動き、造形的な要素の遊びをどのようにはじめ、取り組むのかを探ることにした。

2.2. 分析方法SCATについて

事例分析のために、大谷が開発したSCAT¹⁵⁾という質的データ分析の手法を用いた。具体的には、幼児の行動記録をテキスト欄に入力し、〈1〉から〈4〉のステップ順に書きだす。〈1〉テキスト中の注目すべき語句抽出、〈2〉〈1〉を読んで、言い換える語句記入、〈3〉〈2〉を説明できる概念、語句、文字列を記入、〈4〉論文テーマから構成される概念、あるいは語句で記述する。

〈1〉から〈4〉までの記述後、それにもとづいて、ストーリーラインの記述を行う。実際のSCATによる分析データを表2に示す。

枝を手に持ち、遊びはじめる場の空間的、時間的条件、環境や状況を、時系列に配列した行動記録から、枝を持つ対象児とその周辺で起こる事例を抽出し質的に考察する。全体の中の一

人の事例だが、幼児の細かな動きを捉える。

つくりはじめ、取り組み、出来上がるまでの過程のそれぞれを分析して何がみえるのか、また、可視化されたものの共通性を見出そうと考えた。

3. 結果と考察

Ki児の時間の経過を追って、「つくる過程」を捉えることができた行動記録のデータとして、3日間の3事例を抽出した(表1)。

事例のタイトル名は、以下になる。

表1 〈13事例A～C〉

事例記号(記録日)	事例の場面名
事例A (2015 1/10)	「いいものつくるんだ」
事例B (2015 1/17)	もう一軒の秘密基地
事例C (2015 11/1)	「イノシシが入らないようにしたい」

3.1. 事例Aからエピソードの抽出

Ki児の、自然物である木の枝を持ち、つくり出す表現行為の過程に視点をおいて、3事例をエピソードにしてテキスト化したところ、事例Aは13エピソード、事例Bは5エピソード、事例Cは2エピソード、計25エピソードであった。

幼児の表現行為を生み出す要因を明らかにするため、本論文においては、2015年1月10日の事例Aのみを集約して分析する。

事例Aを提示した理由は、著者自身が、なぜKi児はそのような姿や行動を表しているのだろうと、問いを持った事例であった。また、その思いが連続した行動記録に残されていたため、エピソードに起こしていった。さらに、素材を変化させる道具を用いた特徴が事例Aのみ見られたことからである。

1 エピソードの基本単位は、Ki児の動きを中心に、その周囲の他者を含め、今現在の動きから次の動きに変化するまでの動きの展開をひとくくりとしていく。著者の判断において、分割した枠組みでまとめるところもある。

また、本論文では、事例をエピソードにする分類には、「自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか」の問いに対し、意識（目的や見通し）を持つまでの段階を第1期、目的意識は決まるか試行錯誤し、動きが定まらない段階を2期、ほぼ安定し目的遂行に没頭できる段階を3期と、期別に分けることにしていった。

Ki児の事例Aの表現行為エピソードは、第1期a, b (a: A-①～A-② b: A-③～A-⑤)、第2期 (A-⑥～A-⑪)、第3期 (A-⑫～A-⑬)と、3つの時期にした。

以下は、3つの期区分に従って、Ki児のエピソードを分析し、その考察を行う。なお、エピソードは表2から抜粋したものである。

【第1期a, b】 (a: A-①～A-② b: A-③～A-⑤)

【第1期a】



写真① 10時57分

軍手をはめて準備は整うが

〈エピソード〉 (a: A-①～A-②) 10時57分

(a: A-①) Ki児 (5歳3か月) は地面にもたれかかるように座る。道具を手に、何かをつくら

うと子ども用軍手をはめている。右手には鋸を、左手には短く太めの枝を持つ。持っている枝は、Ki児が朝から持っていた枝と同じ大きさのものであり、削り具合を試しているように見受ける。(a: A-②) 枝を持つ左手は手首が下がり、ゆるく握った様子が見える。右手は、道具の切れ味を確かめるかのようなゆっくりとした動きで強い握り加減ではないように見受ける。

〈考察〉

(a: A-①) Ki児の身体全体の傾きや地面と接触している背中や腰の面積などから、どうやら今はまだ何をつくるのか、その目的や見通しは持っていない。さあやるぞといった何かをつくりはじめるKi児の意気込んだ様子ではないことが、Ki児の全体から醸し出す印象から伺える。(a: A-②) 枝と道具を持つ手の握り加減はゆるく、左足は伸ばし身体全体が傾斜して大地に寄り添う姿勢にみえ、Ki児の身体はしだいに大地と周囲の状況に安定させているようである。

ここにあげたエピソード①②は、手に持つ枝とはめた軍手から、Ki児のつくる気持ちは朝から持っていたと察するが、見通しが立てられず、イメージ待ちの場面であることがわかる。

【第1期b】

〈エピソード〉 (b: A-③～A-⑤) 10時58分～11時30分

(b: A-③) Ki児から1メートル背後にM男性スタッフは小刀で枝を削っている。Mスタッフの正面にいる4, 5歳児男児二人は小刀の扱いを見入る。

(b: A-④) Mスタッフ背後に長い刀 (木の枝でつくったもの) を持つ1年生 (侍ごっこ三人中の一人T児) が対戦相手を探してMスタッフと③の男児二人に忍び寄る動きがある。

(b: A-⑤) Ki児の座す場から少し離れた丘、その急斜面で、4歳と5歳の女児二人が、枝を

持ったまま崖上り（下り）をする。その後、崖を後ろ歩きし、しばらくすると、A子の「いいこと考えた」と思いつく発声があり、遊びが筆者を加え三人となり急展開する。斜面の尾根上から、右脇腹に枝を握り、前方を走る人の枝を左手で握る枝連結スタイルで、三人がジェットコースターのような勢いで走り降りる⁽²⁾。

〈考察〉

上記のエピソード③④⑤では、傍でMスタッフの道具を扱う手元をKi児が見入っていないし、侍的なふりを見ることはあっても侍役の1年生と交わることもない。また、女兒らの歓声があがり勢い余る遊びにおいても、写真記録のKi児の身体は、その場を離れてはいない。

その3エピソードから、枝を手にするKi児が、つくりはじめる「見通し」や目的意識の獲得のために、森で遊ぶ仲間、保育者、スタッフ（以下では他者と表記）の人的、物的環境や状況が重要な要素であることが、考察から明示されたので以下に示す。

一つ目には、A-③で、道具をいつでも扱うことができ、幼児のやりたい気持ちを支えられている。また、枝など自然の素材を手にし、変化させ形に仕上げる表現モデルや、幼児の道具の扱いを援助する他者（大人）の存在が、Ki児の身近にいることである。

それは、心情面において安心感や達成感を支える大切な環境であると考えられる。

二つ目、A-④においては、T児（6歳児）の侍のようなふりや仲間とのやりとりを演じる空間があることと、目の前で実際に真実味ある演技方をやってみせてくれる表現のモデルがいることである。

三つ目、A-⑤では、Ki児から少し離れた丘の急斜面で、4歳、5歳の女兒二人の、枝を手

いこと考えた」発話、尾根上からジェットコースター並みに滑走する枝の遊びはA子が変化させて独自の遊びになり、楽しさを増すものになる。A子の遊びの展開は、瞬時にスピードが加わり危なげであるが、A子の自由な発想によって、面白さと危うさが交差し、緊張感を際立たせ、新たな遊びの志向を漂わせている。

このように、Ki児が地面に座る間中、周囲は静寂な森の環境ではなく、二人から三人で構成される枝を用いた遊びの展開があり、活動的で豊かな身体の動きを伴ったものが繰り返されている。

傳田は、意識について、脳だけでは生まれず、「身体のうちこちからもたらされる情報と脳との相互作用の中から生まれるのです。とりわけ皮膚感覚は意識を作り出す重要な因子であるといえるでしょう⁽¹⁶⁾」と、述べている。Ki児の、何をつくろうかという「見通し」の意識は、森にある自然環境と仲間のつくり出す多様な遊びの状況下の情報と、Ki児のこれからつくりたいと脳内で願う「見通し」との相互作用の中から、方向性をKi児が自分で生みだすものと考えられる。

【第2期a, b】(a : A-⑥～A-⑧ b : A-⑨～A-⑪)

【第2期a】



写真② 11時31分
「トントン」と、軽く枝を叩く

〈エピソード〉(A-⑥～A-⑧) 11時31分

(A-⑥) A子らの連結遊びをする著者がKi児の傍らを横切ったそのとき、Ki児はA子と同じように「いいものつくるんだ」とゆっくりとした口調で、周囲にも聞こえる声の大ききで伝える。

(A-⑦) Ki児の手には、身長よりも長い枝を、枝が重ねて置いてある集積場所から選り、引っ張り出したようだ。

(A-⑧) 枝を鋸の歯で「トントン」とノックするように軽く枝を叩き、「これ(枝)で刀をつくる」という。

〈考察〉

A-⑥ではやりたい遊びを決めたKi児の声が聞こえてきた。Ki児はA子と同じように言葉を並べ、「いいものつくるんだ」と、A子ほどの高いトーンの声質ではないが、ゆっくりとした口調で、筆者や周囲に聞こえる程の声の大ききで伝える。鋸の歯で「トントン」とノックし枝を叩くA-⑧では、それは自分のこうしたいと言語化した上に、さらに、目標を他者に宣言し、刀をつくる意識を確信に近づけるために表した行為の動作と考えられる。エピソード③④⑤⑥の32分間、1月の寒い森にもかかわらず、長い間Ki児は座っている。周囲で遊ぶ他者の動きの情報をKi児は、受容し探索し、向かう目標として、つくりたいものを自己決定していったと考えられる。傍で支援するスタッフ側からいうと、無駄に過ぎているのではないか、座っているだけのときをKi児のためにも何とかしたいと思う。だが、32分というその時間が今のKi児には、次の行程に進むためには、必要な時間と思えるのであった。

加えて、叩いたノックの音、枝の振動は、Ki児の内面にも響かせているのではないかという印象が持てる。小声ではあるが周囲の仲間聞き取れる言語表現が現れている。決めた目標を

Ki児は、軽快でリズムカルな手の動きと音に表し、言葉に表わし、しだいに開く言語感覚や、つくろうとする気持ちが高められ、判断する感覚が芽ばえ育っていったと考えられる。

Ki児は、身長よりも長い枝を選り、手に入れた。枝は、自分の意識した価値に相応した枝を見出し、引っ張り出した。意識(イメージ)をもち目標をもった上で、つくるための素材の枝を新たに選ぶA-⑦のKi児の行為は、創造的な瞬間¹⁷⁾であるといえる。この引っ張り出す行為は、Ki児の幾度も重ねられてきた経験知からの体験であり、これまでの表現行為の反復であることにも気づく。

刀をつくる目標を、エピソード⑥までのKi児が自己決定するまで、Ki児の発話、リズムカルな手の動きと叩いた枝の振動、言語表現は、Ki児の内から外、外から内へと伝え響かせる過程の中で、確信をもったKi児の行為行動になっていったと考えられる。

【第2期b】(b:A-⑨～A-⑪)〈エピソード〉(b:



写真③ 11時32分
切れないな

A-⑨～A-⑪) 11時32分～11:35

(b:A-⑨) 道具を使って枝を切りはじめる。くの字に足を屈伸させてしゃがむ。すると、「切れないな」とつぶやく。が、直ぐにKi児は枝

を跨ぎ、向きと位置を変えて、再び切りはじめる。
〈考察〉

Ki児は、道具を使って枝を切りはじめるが、木の堅い節の材質と出会い、「切れないな」とその困難さに気づき、つぶやく。くの字に屈んでいた足は、立ち上がり、枝を跨ぎ、また屈み枝に向かう。Ki児は向きを変えて、再び切りはじめる。困り感を言語に表現することや、困り事を解決するために、素早く立ち、自分の姿勢や位置、向きを変化させる行為は、Ki児の新たな動きである。A-⑨のKi児は、目標に向かうために、自分であれこれと考え、挑む自分に会っていると考えられる。手先だけの技法にとどまらず、身体の向きを変えるなど、動きを模索し目的の達成に努力するKi児がいる。



写真④ 11時35分

枝の位置を腰の位置に調整して鋸を挽く

(b:A-⑩) A-⑨からさらに切る枝の置き場を腰の高さに調節して、再び目標に向かう。

(b:A-⑪) 道具(鋸)の刃を引く行為を繰り返す。
〈考察〉

A-⑩でKi児は、枝の位置を変え枝の握りやすさ、道具の使いやすさの調整を自分の身体で確かめる。さらに枝の置き場を腰の高さに調節する。道具と物と自分との位置の調整をKi児なりに精一杯考え、再び、挽く行為に戻り試す。道具(鋸)の刃を引く行為を繰り返すうちに、

枝と向き合う角度や握る場所、道具を扱う加減を身体や手の感覚によって実感し、自己の目的の実現に向かう。Ki児は、ここまで表現する行為を変化させてきたが、少しずつ安定して、道具を扱う感覚が磨かれ、A-⑩ののち、鋸を挽く動きは連続的な行為となる。

【第3期】(A-⑫～A-⑬)



写真⑤ 11時38分

木の節が強く進まなかったが添え手で安定する

〈エピソード〉(A-⑫～A-⑬) 11時38分

(A-⑫) 鋸を挽き続け、しばらくすると木の節部分の切断は強く、Ki児は動きが進まない。Ki児は「ぐらぐらする」と揺れる枝の状況を説明する。どうしてほしいのかを尋ねるMスタッフは切断面の両側の肩幅程度に添え手をする(11時38分)。枝は固定され作業は安定する。(A-⑬)木の加工は鋸を挽く行為の持続に加え、枝と道具を扱うコツを、Mスタッフは小出しに話す。枝を手で回す、鋸は挽くときに力を含めるといふ大人の声にKi児は耳を傾ける。

〈考察〉

幼児の力だけでは歯が立たない枝の節の硬さに出会うが、スタッフの添え手で枝は固定され、心強い安心感という支えをKi児は味方にすることができたと推測する。

それは、真上から手元の枝を垂直に見おろし

て持つ枝とKi児の頭の距離間に、Ki児が取り組み挑もうとする真剣さが生まれている。目標に取り組み向かうKi児の真剣な思いが、周囲にいる人を巻き込み一体となる連帯性や、共同の志向性を生みだしていると思える。

A-⑫, Ki児は鋸を挽いてもこれまでとは違う枝の抵抗感に身体全体の感覚で向き合っている。Ki児の「いいもの」づくりは、このように時間はかかるが、急がずに適宜にKi児の動きを探り、先走らず、Ki児に添う保育指導・援助方法をとっている。道具を扱うための技(文化)を伝授する大人の存在とその支えA-⑬があって、やっと、Ki児本人は自身がつくろうとする目的の「いいもの」づくりを現実に叶えている。

4. 総合考察および今後の課題

4.1. 総合考察

以上のように、枝を手を持ち、道具を用い、つくる過程の表現行為を、Ki児の手の動きに着目して詳細に考察してきた。

つくる過程におけるKi児が生みだす表現行為は、目的意識を持つまで探索する1期、あれこれと試行錯誤する2期、困難にぶつかるが安定して取り組む3期に分けることができた。Ki児の動きは次のようなものである。

【第1期a】のKi児は、手を保護する安全対策は早朝からできており、まさに動きだせる準備とつくる願望はKi児の外観から見出せる。だが、枝と道具を手で触れているにとどまり、「いじる行為」であり、何をつくるかの目標、目的、計画の「見通し」は明確なものはないとみてとれた。

では、枝に触れ、「いじる行為」に意味はないのかというと、Ki児の場合、手で枝や道具

に触れる過程において、つくろうと動きだす遊びの始点であると理解することができる。なぜなら、背中までももたれかかるように座るKi児は先が見通せずにいたのだが、しだいに身体は大地に委ね一体化し、気持ちを安定させ、これから何かがはじまるようであったからである。

さらに、Ki児が座る安定した場所を拠点に、あたかもアンテナを掲げ張り巡らせるようにし、Ki児は全感覚を研ぎ澄ませ、情報収集ができる体勢をつくり、目的意識を得るようにしていったのではないかと推察ができた。

【第1期b】でも、Ki児の何かをつくろうという目的意識について、【第1期a】同様にまだ持っていない。しかし、Ki児はつくる目的や目標を持つために、森の自然物と仲間がつくり出す多様な遊び環境の状況下から、次のような情報収集を行っていると考えられた。

例えば、他児の「いいこと考えた」の言葉の響き、年長児の枝でつくられた刀を持つ勇壮な動きの視覚情報、枯れ葉の斜面を走る音やブランコを揺らしながら幼児同志がやりとりをする声や歓声、といった聴覚情報など、様々な森で遊ぶ他者の情報がある。聞こえ感じる他者の音や感覚情報は、Ki児のまだこれから何をつくるのかが決まっていない意識との相互作用により、Ki児なりに方向性を見出し、確かな現実につながる目的を生みだそうとしていったと考えられる。

【第2期】で気づくのは、「いいものつくるんだ」と、Ki児のつくりたい気持ちを素直に言葉に表し、さらに枝を叩き響かせている。我が身の内面に伝えているとも思える。また、枝が「切れないな」とこれまでも出会ってきたであろう困り事を、他者に伝わる音量でKi児はつぶやくように音声化する。

そして、Ki児は、その困り事を直ぐに自分

の課題にし、鋸を挽く動きを繰り返す、「切れないな」を、次のように試行錯誤しながら自己解決していく。

枝とどう向き合うといいのか、握る枝の位置のどこをどう持つと鋸を挽くことが上手く扱えるのか、そのことを探るために、枝に向かう方向を変えたり、切る角度や位置を変えたり、鋸の挽きやすい高さを考え、置く場所を変化させたりする。Ki児は目的達成のために次々と持つ枝を移動させ、鋸を挽く動きを安定させ、取り組みやすい姿勢の追求に努力する。

また、これまでにあまりされてはこなかった他者への伝達行為をするKi児がみられた。それは、Ki児の変容ともいえる。内なる気持ちを音や音声で外側に響かせ言語化し、身体の行動を伴い、自己目的の実現のために、能力を駆使するKi児なりの個人的な創造性のある瞬間場面と考えられる。

【第3期】、自然物は、幼児の力量に及ばない問題を差し出す。例えば、どうしてもなく堅い材質に出くわす。Ki児は、困難な対象の枝にさらに頭を近づけて挑む。枝と道具を持つ手に視線を向け、姿勢を丸め、つくる目的を実現しようと没頭するKi児がいる。枝は加工され、他者はその変化が見える。可視化の効果もあり、目的実現に向かうKi児に、周囲にいるスタッフは手を添え、そして技を順に伝えはじめる。スタッフはKi児と気持ちを共にして、刀が仕上がるまで、同じ鋸を挽く動作の継続のために、技術内容の伝達を行いながら持続させるのであった。

Ki児の刀をつくりたいと挑む意識は、他者の支援を素直に受容する幼児の柔軟さを生むと筆者は考える。Ki児は他者と一体となる姿が筆者の目に映った（写真⑤）。Ki児は、連帯の意識や、共同体としての共通意識を持ちはじめ

め、取り組みを進めていったであろう。できないなと苦戦し、そういいながらも、Ki児はやり切ると、そこに達成観がKi児に見出せる。やり切ろうとする幼児に、支える他者がいて、再び訪れる困難な問題にでも、他者と挑戦すれば成就させられる自分がいるという意識を生みだすと筆者は考える。

4.2. 今後の課題

Ki児のつくる目的が明確になってから、手や身体の動きの活性化や言葉を音声化するなど、Ki児自身が成長する変化や変容がみられ、その行為には、同じ鋸を扱う場面の繰り返しがみられる。幼児自身の向きと位置を変えて挽いたり、切りやすい高さや位置に枝の置場を決めて挽いたりし、そのときの座り方に視点をおいても、くの字のしゃがみであったり、立った姿勢で腰を曲げているが足は伸ばしながらに行く。鋸で切るという動き一つとっても、連続した、繰り返しの反復性がある。その共通した動きの重要性について、この論文中には言及できなかった。

その他、エピソードの抽出にあたって、「つくる過程」の行動記録から、3日間の3事例を抽出した（表1）にもかかわらず、本研究では事例Aに絞り込んで事例B、Cを扱うことができなかった。事例B、Cは、道具を使わずにおうちや、基地づくりの活動を展開するものであることから、「つくる過程」における幼児の表現行為の比較検討ができると考えている。

今後は、以上のことを含め、違った観点からの検討が自然と幼児とのかかわりの研究を深く進めていけると考えている。

注)

- (1) 幼児らが鋸のような木工道具を用いて何かをつくるときには、自分の手や指を守るために、道具を持たない手には軍手をはめるよう、安全面から声をかけてきた。
- (2) 大抵の4歳児（二人のうちの一人I子は4歳児）なら、お尻で下りる程の急傾斜である。A子のオリジナルの遊びは、尾根上からジェットコースターのように上下する。そのため、足腰の踏ん張りがいい身体は鍛えられる。それぞれ自分の枝を後ろの人と手で持ち他者の枝を前の人と持つというユニークな形態で連結する。何度も繰り返す女児二人はますます息が合う。つながる面白さや喜びとスピードのスリル感や緊張感が漂う。著者はバランスを崩さないよう慎重に足を踏ん張り速さを加減したりとするが、二人の速度は増す。悲鳴に近い歓声を発するのは著者だけで、女児二人は無言。言葉も声も出ない程の真剣な遊びをA子は求めているのかもしれない。I子においても必死であるために何も言葉にはできなかったのではないかと思いはよぎる。

引用・参考文献

- 1) 河合雅雄, 1997, 『子どもと自然』, 小学館。
- 2) 田尻由美子・無藤隆, 2005, 「自然とかわる保育」で育つ力についての評定基準と実証的研究の試み, 精華女子短期大学研究紀要31, 27-35.
- 3) 中西さやか・中坪史典・堺愛一郎, 2010, 「森の幼稚園カリキュラム」における幼児と自然との相互作用に関する研究—他者とのかわりにみる幼児の変容プロセス—, 『広島大学大学院教育学研究科紀要』, 第三部 教育人間科学関連領域, 59: 167-174.
- 4) 小笠原明子・前田泰弘, 2009, 「野外保育による幼児の「育ち」の支援」, 日本保育学会, 保育学研究, 47-2, 121-131.
- 5) 中坪史典・久原有貴・中西さやか・堺愛一郎・

山元隆春・林よし恵・松本信吾・日切慶子・落合さゆり, 2011, 「アフォーダンスの視点から探る森の幼稚園カリキュラム: 素朴な自然環境は保育実践に何をもたらすのか」, 『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』, 39: 135-140.

- 6) 梶浦恭子・今村光章, 2015, 「なぜ幼児は「森のようちえん」で枝を拾うのか: 幼児の行動記録をてがかりに環境教育= Environmental education 24(3), 137-144.
- 7) 幼稚園教育要領, 2008, 文部科学省.
- 8) 同上
- 9) 岡本夏木, 2005, 『幼児期: 子どもは世界をどうつかむか』, 141.
- 10) 春木豊, 2011, 『動きが心をつくる』, 43.
- 11) 石倉卓子2012「幼児の育ちに必要な園庭環境の検討: 表現行為を可能にする自然材と道具の関係性」保育学研究50(3), 252-262.
- 12) 8) と同じ 118-128.
- 13) 同上
- 14) 幼稚園教育要領解説, 2008, 文部科学省, 176.
- 15) 大谷尚2007, 4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育学54(2), 27-44.
- 16) 傳田光洋2013『皮膚感覚と人間のこころ』, 新潮社, 145.
- 17) 佐藤学・今井康夫編・矢野智司, 2005, 『子どもたちの想像力を育む: アート教育の思想と現実』, 東京大学出版社, 56-71.

謝辞

本研究は、「S森のようちえん」の保育者ならびに子どもたちのご協力があって、はじめてなしえるものであります。この場をお借りし、深く感謝の意を表します。